

2010年3月26日

E C A F E 人脈と国際開発学会

国際基督教大学名誉教授 中内恒夫

国際開発学会の創設にあたって、その正確な前史の記録をまとめるには広範な調査が必要になる。私自身の見聞・体験や人脈は極めて限られているので、おそらくそのうちのごく一部の流れを示すことになると思う。ほかにもいろいろな動きや願望があってそれらが集まって学会創立にこぎつけられたものと思う。わたしはその中で国連のE C A F E (U N Commission for Asia and Far East アジア極東経済委員会)に関連することを述べてみたい。就中、大来佐武郎氏に関することで私も身近に体験した事を中心に回想してみたい。

わたしは2度にわたってE C A F Eの調査企画部で働いたが、最初は1963年～65年で、2度目は1977年～79年で合計4年半いたことになる。2度目のときは部の名前が開発企画部と改められ、私はその部長を務めた。E C A F Eの1960年代初期には戦後日本の国際的認知度はまだきわめて低かった。国連への加盟にあっても、かつての交戦国中国などは積極的に招請するなどとはほど遠いものであった。だが、アジアではパキスタンが日本をE C A F Eのオブザーバーとして積極的に招いてくれた。その初期にE C A F Eと関係をもった人々は、経済企画庁の大来佐武郎氏や、一橋大学の都留重人教授でその後、東大の河川工学教授、安芸皎一氏などが部長として加わった。その後、都立大学から参加した喜多村浩氏が課長から調査企画部長になり長期滞在されたので私どもは喜多村邸で様々な人と会うことができた。

当時の日本の国際的なネットワークはまだきわめて少なく、国際交流は上のような個人個人が国連や大学を通じてのものが主であった。E C A F Eは調査機関であって、行政の実行主体ではないという位置づけであったが、アジアハイウェイとメコン川流域開発と海洋調査は例外であった。それに加えてアジアにおける開発資金調達のための地域銀行設立お機運が高まるにつれ、日本の大蔵省からアドバイザーとして渡辺武氏や、若手の設立準備担当の千野忠男氏や中平幸典氏がやってきた。

さて、今思い出されるのは大来氏がよく言っておられた次の言葉だ。「外国の開発研究機関から日本も参加協力してくれと頼まれても、日本に受け皿になるものがないので困る。」と。この感想がのちに国際開発学会の設立に結びつき、展開してゆくのである。

大来氏は有能な日本の官吏としてその実力は、パキスタンやインドの **British Civil**

Service に相当する Indian Civil Service 試験に合格した能吏たちの一目置くところであったばかりでなく、包容力あり世話好きの人柄であったから、アジアでは大きな人望があった。その後私はあちこちでその雰囲気に触れる機会があった。インドのクリシュナムーティなど、私などからみると近寄りやすい官僚のように見えたが「大来さんは実に謙虚な人だ」と称賛を惜しまなかった。

10年ぐらい後に米国政府予算による「琉球経済開発調査報告書」を大来主査のもとでつくることになり大来氏と身近に接触する機会が続いたが、ほかにもインドネシアの調査にも関係した。ある時、大来氏と一緒にバペナス（国家社会開発庁）のエミールサレム副長官に会った時、大来氏が親身になってインドネシアのコメ不足の解決のために日本船の配船に尽力しているのを知った。工業化の初期にあったインドネシアでは「我々にも工場の煙害を分けてもらいたいものだ」というドライジョークをエミール氏が言っていたのが忘れられない。

こういう個人的な情熱と絆がこのころの日本の対外関係を固めるうえで重要な要素であったことが痛感される。これが後年 ASEAN や APEC が組織的な発展を遂げるにあたって、大来佐武郎氏、小島清教授の重要な貢献につながっていったのである。

大来さん自身はあらゆる場合にすこしも力まぬひとで、英語をしゃべる時も決してしゃれた表現をしようとかテクニカルタームを多く使おうとかすることなく、やさしい表現でどちらかというとなんとなくしゃべるのだが全体としてはなかなかよくまとまった話に仕上がっていくという調子だった。これは、国連の CED(経済開発委員会、5地域委員会の調査部長が出席する)というような公式の場合の発言でも同様であった。

これが国際開発学会にも影響を与えているというのは考えすぎだろうか。つまり、理論の偏重に陥らず、門戸を広く官庁や実業界に開いて自由・広範な人脈を養成するという点である。この点は ESCAP の人脈である広野良吉氏が国際開発学会の第2代会長になって引き継いで行くことになる。

もともと大来氏は東大電気工学科の卒業であるから基礎的訓練は理科系であるが、非常に広い視野の中で物を見る習慣が身につけていて、観察から結論へ運ぶ思考過程の中で論理と直感がよく醗酵して有用な提言にまとまる。わたしは大来氏と同席してそのスピーチを聞く多くの機会を回想すると、政策提言という分野で同氏の持つ能力がタダものでないことを痛感した。

大来さんがよく語って心の支えにしていたことは、満州時代に出会った人々との「塾」

を通ずる交わりである。塾における切磋琢磨がいかに大きな人材養给力になるかという信念みたいなものが感じられた。そういう考えに触発されて設立されたのが国際開発研究者協会（SRID, Society for researchers of international development）である。この協会は産・管・学いずれの分野も分け隔てなく、自由自在に体験的に遭遇する問題を報告して解決を探るという実践的な色合いの濃い協会であった。我が国の援助の増大につれて途上国の開発にかかわる仕事に従事する人々が増加し、その間に起ってきた同学の士との交流への願望を満たすものであった。これは国際開発学会の創設にあたって一つの源流となったことは間違いないと思われる。これは今日も IDeA(International Development Associates,Ltd)というコンサルタント会社となって開発関係のコンサルタント業務を遂行している。併行してこの頃、国際開発センター（IDC）という5官庁を基盤とする公的機関ができたが、これらの実現にあたって大来氏の存在は大きな推進力であった。一方世界的にはSIDがあつて日本の共働を求めているがこれは後に国際開発学会が受け皿の役割を果たすことになった。

このように初期の個人的カリスマ的役割から組織的發展を遂げていった日本の開発研究機関の發展史を見ることができる。さて今後期待される働きを考えると、望むらくは官僚的な形式的関係に陥らず、初心を忘れず、密接な人格的交流を含むゲマインシャフト的要素を持ち続けることだ。初期のECAFE事務局長 ウニョン氏がよく言っていたように、Asian way(話し合いによる満場一致)を探す共通の場に座る姿勢が大事ではないだろうか。

以上